第 26 回映像メディア英語教育学会

九州支部研究大会 2024

The 26th ATEM Conference of Kyushu Chapter

[日時 Date]：2024 年 9 月 7 日（土）　　開場 13:30　開会 14:00

September 7th, 2024　　Open 13:30　Start 14:00

[会場 Place]：福岡大学（中央図書館 1 階多目的ホール）

Fukuoka University, Multipurpose Hall in Central Library 1F

映像メディア英語教育学会
ATEM
The Association for Teaching English through Multimedia

第 26 回映像メディア英語教育学会九州支部研究大会

[会場 Place] ：福岡大学（中央図書館 1 階多目的ホール）
（Fukuoka University, Multipurpose Hall in Central Library 1F）

[日程 Date] ：2024 年 9 月 7 日（土）　（September 7th, 2024）

13:30～　受付開始 Registration

14:00～14:20　開会式・支部総会 Opening Ceremony

司会：松尾　祐美子

・開会の辞　支部長　：石田　もとな

・支部総会

2023 年度会計報告&2024 年度予算案　事務局長：吉村　圭

2025 年度運営組織案　支部長　：石田　もとな

14:30～16:55　研究発表 Sessions

1．映画『オッペンハイマー』の製作意図
村田　希巳子（北九州市立大学）

2．小説の多様な語りをアダプトする—映画『カラー・パープル』(2024)の手法
秋好　礼子　（福岡大学）

3．『Desperate Romantics』（2009）を通してラファエル前派の活動と女性の社会進出を読み取る
河野　弘美　（京都外国語短期大学）

4．英文読解と映像の組み合わせによる「人権問題」への取り組み
呉　春美　（神奈川大学）

5．*Charlie and the Chocolate Factory* の改訂と映像化をめぐる Oompa-Loompas のメタモルフォーゼ
吉村　圭　（佐賀大学）

16:55～17:00　閉会式 Closing Ceremony

・閉会の辞　担当：秋好　礼子

17:00～17:30　親睦会 Tea Time

18:00～　懇親会 Party

懇親会について
会場　：さかな市場 博多筑紫口店
福岡市博多区博多駅中央街-1-1（JR 博多駅）

【発表１】Session1 14:30-14:55

映画『オッペンハイマー』の製作意図

村田　希巳子（北九州市立大学）
司会：進藤　三雄

ユダヤ系アメリカ人、オッペンハイマーは、「原爆の父」と称せられ、当時著名な物理学者らとともに、マンハッタン計画を主導し、原子爆弾を完成させた人である。彼は、ゼウスから火を盗んで人類に与えた、あの反抗的なギリシャ神プロメティウスのように、我々に原子の火を与えた。そして、彼の後半の人生は、ゼウスのようなアメリカ政府当局から罰せられるのである。アカデミー賞最多７部門を受賞した映画『オッペンハイマー』は、長らく日本で上映されることが論議されていたが、今年３月に上映されると、今年の興行成績がトップになり、再上演されることが決定している。

本発表では、原爆に取り組んだオッペンハイマーや著名な物理学者たち、それを完成させた後の彼や物理学者たちの倫理的態度にも注目していく。さらに水爆開発後の彼らの思想の違いも紹介していく。日本は唯一の被爆国で、広島、長崎の惨状を見たアインシュタインなどの良心的な物理学者たちは恐れおののいた。オッペンハイマーも、「われは死神なり、世界の破壊者なり」と言った言葉は有名である。本発表では、原作と映画の違いから、映画の製作意図をさぐり、彼の生涯の倫理観の変容を分析する。さらに、彼が残した有名な言葉は、英語教育にも大きく貢献すると思われるので、集めて紹介していきたい。

【発表２】Session2 15:00-15:25

小説の多様な語りをアダプトする—映画『カラー・パープル』(2024)の手法

秋好 礼子（福岡大学）
司会：進藤　三雄

Alice Walker (1944-)の *The Color Purple* (1982)は、ピューリッツァー賞受賞小説で、1985 年に Steven Spielberg 監督のもと製作されたこの小説の映画化作品は、アカデミー賞 10 部門にノミネートされた。さらに本小説は 2005 年にミュージカル化され、2023 年（日本では 2024 年）には、Spielberg や前作の出演者である Oprah Winfrey らによって製作された新たな映画が公開された。小説 *The Color Purple* は、(1)主人公セリーの神に宛てた手紙、(2)セリーとその妹ネッティの手紙で構成されている、いわゆる書簡体小説である。セリーが神に宛てた手紙は、最初と最後の神への呼びかけでそう形式づけられてはいるものの、他に語りかける相手がいないセリーの独白であり日記とも言える。妹ネッティの手紙は、セリーの夫によって長い間隠されてセリーに届かないため、ネッティが一方的に語る形となり、これもまたネッティの独白であり日記のようであり、時間を置いて出来事が語られるという点では自伝のようでもある。この複雑な語りが２作目の映画の中でどうアダプトされているかについて、本発表で考察する。

【発表３】Session3 15:30-15:55

『Desperate Romantics』（2009）を通して
ラファエル前派の活動と女性の社会進出を読み取る

河野 弘美（京都外国語短期大学・西日本支部）
司会：石田　もとな

19 世紀イギリスは、既存の社会構造を打破する動きが活発化した時期で、女性が社会進出し男性優位社会に変革をもたらした時期でもある。その時代に絵画を中心とした視覚芸術集団「ラファエル前派兄弟団（Pre-Raphaelite Brotherhood)」（以下「ラファエル前派」）が誕生する。ダンテ・ガブリエル・ロゼッティ（1828-1882）が中心に結成したラファエル前派はイギリス最古の芸術大学が掲げる芸術に反発し、既存の芸術美を打破する動きをする。彼らの芸術は 19 世紀を代表する美術批評家ジョン・ラスキン（1819－1900）により認められ、芸術的地位を獲得していく。美術評論家の一声で絵画の評価と価値が変わる模様がユーモラスに描かれているのが英国 BBC 制作のテレビドラマ『Desperate Romantics』（2009）である。ドラマでは絵画用の女性美術モデルも賛美される様子が描かれている。作品の中で、女性美術モデルはプロフェッショナルなモデルとしての自覚と覚悟をもってポーズをとり、美術モデルは既に職業であったことが伺える。本発表では、『Desperate Romantics』に登場する女性美術モデルに着目し、職業としての女性美術モデルとラファエル前派の描く女性像への理解を通して女性の社会進出を考える学習法を提案するものである。

【発表４】Session4 16:00-16:25

英文読解と映像の組み合わせによる「人権問題」への取り組み

呉　春美（神奈川大学・東日本支部）
司会：石田　もとな

英語教育を通しての市民教育は、文法や語彙などの英語学習だけでなく、「市民」としての原則（principle)、知識およびスキルの統合を意味する。（Hennebry-Leung & Gayton）そして、市民教育の基盤の一つとなるのは「人権」である。

「日本には人種差別がない」と公言する学習者たちは決して少なくない。しかし人種問題は世界各地での戦争や抗争、ヘイトスピーチなどを引き起こす主要因のひとつである。授業では 1968 年メキシコシティで開催されたオリンピック競技会での表彰台で、Tommie Smith と John Carlos がアメリカでの黒人差別への抗議を取り上げた新聞記事と動画を組み合わせることにより、また二人に同調した Perter Norman により、オーストラリアでの人種差別についても学び、さらに日本の歴史についても触れる。コース最終日に学習者たちに再度「日本には人種差別がないのか」を問いかけ、また「人権」における認識がどのように変化したかを検証した。換言すれば、英文読解と動画の組み合わせにより、学習者たちにどのように「当事者意識」（Empathy）に影響を与えたかを考察する。

【Reference】

M Hennebry-Leung and A Gayton (2019) Teaching Language and Promoting Citizenship, Edinburgh University Press
堀江恭子・呉春美・Geoffrey Tozer 編著（2024）『Reading material:　Stories of the World We Live In
―　クォリティペーパーで読む私たちが生きる世界』金星堂
映像の世紀バタフライエフェクト：モハメド・アリ 勇気の連鎖：https://www.bilibili.com/video/BV1234y1s7AX/
（閲覧日: 2024 年 7 月 19 日）

【発表５】Session5 16:30-16:55

Charlie and the Chocolate Factory の改訂と映像化をめぐる Oompa-Loompas のメタモルフォーゼ

吉村　圭（佐賀大学）
司会：松尾　祐美子

本発表では、イギリスの作家 Roald Dahl の *Charlie and the Chocolate Factory* における Oompa-Loompas（以下「OL」）の人種差別的描写について、同小説の初版（1964）・改訂版（1973）と、同作品の映画３作品（1971、2005、2023）を用いた議論を行う。OL は原作の改訂と映像化において、幾度もその設定が大きく書き直されてきた。現在一般的に入手可能な 1973 年改訂版の小説において、OL は「ルンパランド」（Loompaland）から連れてこられた、「うす紅色」（Rosy-white）の肌と「金茶色」（golden-brown）の髪の色をした「小さな人々」（tiny men）とされている。現行版でこそ架空の国出身の白人的容姿をした種族とされているわけだが、初版（米：1964＆英：1967）では、「アフリカから直輸入」（Imported directly from Africa）された肌が「ほとんど真っ黒」（almost pure black）な「小人族」（Pygmies）とされていた。さらに初版から現行版に至るまで、OL は奴隷貿易のパロディとして描かれている。というのも、彼らは「運搬ケース」（packing case）に詰められ「輸入・密輸」（imported / smuggled）され、Willy Wonka が経営するチョコレート工場でカカオ豆という法外な対価で危険な労働に従事させられているのである。本発表では、この OL をめぐる人種差別的描写がいかなる手法で映像化されてきたのか、映画３作品を用いて議論する。